

## キリスト「」を門であり、道

(マタイ7・13～14)

## 一、山上の説教から聞く

きょう指定されたのは、マタイの福音書7章13節、14節ですが、このことばは、イエスさまが「山上の説教」の中で語られたことばです。山上の説教については、これまでに何度も申し上げましたが、5章から始まり、7章で終わります。場所はガリラヤです。

聖地旅行に行かれた方は覚えておられると思いますが、ガリラヤ湖(現在のティベリアス湖)の北にあるカペナウムに「山上の垂訓教會」という、聖堂が八角形になっている教会があります。その場所でイエスさまが「山上の説教」(「山上の垂訓」)を語られたということから、フランシスコ修道会によって教会が建てられ、今では観光スポットになっています。

今しお、ガリラヤ湖畔にある「山上の垂訓教会」のことをお話ししましたが、あの場所に「山」はありません。強いて言えば「丘」です。そういうわけで、マタイが語った「山」とは、場所のことを語っているのではなく、神のことばをお告げになる場所としての「山」であつた、と受け取ることができます。聖書によれば「山」は、神のことばを受ける場所です。福音書記者のマタイは、そういう

## 二、「狭い門から入りなさい」

イエスさまは山上の説教で、私共にはなかなかできないことを語られました。例えば5章27節、28節です。『姦淫してはならない』と言わっていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。』と。性欲は神さまが、特に男に、オスに、授けたものです。男性は、小学生の頃から抑えるのがたいへんな場面が出てまいります。ですが人(アダム)は、自らの意思で押さえるようにと造られました。それが分からないと放縱に走り、人生において失敗をしてしまいます。もちろんクリスチヤンでも、牧師でも、司祭でも、同じです。そこを避けて歩むためには、狭い門から入り、進むことの心がけが必要です。

あるいは、5章43節、44節もそうです。『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言っていたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

もう一つ、6章14節、15節も挙げたいと思います。『もし人の過ちを赦すな

う意味合いで「ガリラヤの山」を設定したと、私は考えます。

ら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません』と。なかなか赦すことのできない、人の過ちがありますね。思い出す度に怒りがこみ上げてくるような記憶がある場合です。そういう場合は、『私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています』(ローマ7・19)と正直に認めて、主からのあわれみを求めるのがベストかと思います。

などなど、山上の説教には人となられた神、御子イエス・キリストの教えが満載されています。それは、いつときにも語られたのではなく、様々な場面で語られたことばを、マタイがまとめたものかと、私は考えています。

ひと言で言うなら、イエスさまが示された神の基準は、私共にはなかなかできない内容です。それらを指して主イエス・キリストはおっしゃいました。また、今現在も聖靈によって語つておられます。『狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入つて行く者が多いのです』と。続けて語られました。『いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです』と。

永遠のいのちに至る門は、あるいは、救いのうちに至る門は、言い換えるなら

いに至る門は、狭いと教えられます。狭いがゆえに、細心の注意を払わないと、滅びに至る大きな門扉から入つてしまい、そのままずるずる行つてしまします。イエスさまによって示された教えに生きるためにには注意を払うことが必要です。ですが、けつしてむずかしいものではありません。『御靈によつて歩みことは決してありません』(ガラテヤ5・16)とありますから。また、ヨハネの手紙第一5章3節には、『神を愛するとは、神の命令を守ること』です。その命令は重荷とはなりません』とあるからです。ですから、主にあって実行してください。14節後半に、『それを』すなわち狭い門を一見出す者はわずかです』とあります。主イエス・キリストを信じて歩むとは、狭い門を見いだして歩むことであると、肝に銘じてください。

山上の説教はだれに語られたのでしょか。弟子たちと、イエスさまの教えを聞こうとして集まつて来た群衆です。教会の外の人たちではなく、キリストを信じている私たちに、そしてキリスト教に興味を抱いて集まつて来ている人たちに対してです。主イエス・キリストを信じた後も、広い門、滅びに至る門から歩んでしまつ方が多いので、主はこのようなことを語られたと思われます。